

第 5 回 中部地方水供給リスク管理検討会 (R2. 3. 17 開催) 議事要旨

議事(1) 前回(第 4 回)の議事要旨

第 4 回検討会 (R1. 12. 18 開催) の議事要旨を紹介した。

〈補足意見等〉

(特になし。)

議事(2) モデル水系の検討

● 検討の進め方

モデル水系(矢作川)の検討の進め方を確認した。

● 影響・被害 水量不足 過去の実績に基づく想定

1994(H6)年渇水を解消した9月中旬(前線)と9月下旬(台風)の降雨がそれぞれ無かった場合と何れもが無かった場合のダム貯水量と取水制限率の時系列的推移、生活用水への影響の検討結果について意見交換を行った。

〈主な意見〉

- 春からつづく渇水の解消には、9月の降雨の有無が大きく影響することが明らかになった。
- 今回、降雨の有無に応じた検討がモデル化されたが、その内容・過程についてももう少し詳しくわかるように整理してはどうか。
- 工業用水や農業用水も含め、取水量の時系列的な推移も整理するとわかりやすくなるのではないか。
- 供給遮断被害の図(資料2別紙)のように、地域の方が危険度を視覚的に比較してとらえられるように整理してはどうか。

● 影響・被害 供給遮断被害

渇水年 2001(H13)と平水年 2015(H27)を例に、生活用水の取水口それぞれからの取水・導水不能が30日間生じた場合の県営浄水場から市町水道への送水状況の時系列的推移の検討結果について意見交換を行った。

〈主な意見〉

- 補填によっていろいろな地域で被害が薄まり、送水量がゼロになるような事態を避けられることがわかった。その反面、広範囲で被害が生じることになりかねないとも言える。どのように対応していくべきか、地域の合意も含め議論をしっかりと進めていくべきだろう。

- 補填によって分かち合うという考え方をルール化していくことは、興味深い課題だ。住民の理解も得た上でどの程度の合意形成ができるのか、難しい問題もあるだろう。
- どこに住んでいても送水量がゼロになる可能性があることが理解されれば、補填し合うことへの納得も得やすくなるのではないか。
- 補填については、水系間のやりとりも考えることが必要だし、補填し合う地域等のスケールを原則的に定めておくことが重要ではないか。また、水供給の安全度には、地域毎の強弱があることを明らかにしていくことも大事だろう。
- 今回の補填有りの検討結果は、利用者の理解・協力を得られることが前提であり、施設の配置や能力、地形的な条件を考慮せず平準化したものなので、今後は詳細な条件も反映した検討を進めてもらいたい。
- 補填ができない事態が生じる危険性についても考えておくべきではないか。
- 供給遮断というと配水池からの配水・給水の遮断など能動的な動作を指すことが多いので、それよりも前の水供給プロセスで外的要因によって遮断されてしまう今回のようなケースは、「取水・導水不能」など、ダイレクトな呼称とする方がわかりやすいのではないか。

- **リスク要因の規模 水量不足 気候変動を考慮した将来の想定**

気象シミュレーション実験のデータをもとにした、降水状況の気候変動に伴う変化の傾向分析結果を紹介した。

〈主な意見〉

- 気象シミュレーション実験データのバイアス補正について、今回は月ごとの日雨量データすべてを標本にクオンタイル法で行っているが、少雨に注目するのならば、台風が来ているのかいないのかなどの誤差が生じた原因を確認し、それに応じた補正を行うことが重要となる。また、取水制限の時系列的な推移をトレースできるように、月雨量や2ヶ月雨量などで大局的な確認をしておく必要がある。
- 気候変動を考慮した将来の想定においても、過去の実績に基づく想定のように「d4PDFの降雨データ→流出計算→取水やダム補給・貯留のオペレーション→ダム貯水量・取水制限段階」の過程で検討ができるのではないか。また、バイアス補正についても、ダム貯水量などの知りたい値が合うように行うことの方が適切である。
- 今回は降水状況の気候変動に伴う変化の傾向分析にとどまっているが、河川流量やダム貯水量、取水状況がどうなるのか、一連での検討を進めてもらいたい。